

六回

105 アリストテレスにあっては、〈ある〉ということが〈作り上げられて使用可能な状態で眼前に現前している〉という意味に解されているということにハイデガーは気が付いた。

106 ハイデガーは、〈ある〉ということを中心に述べたような意味で〈眼の前に現前している〉事と解する存在概念、つまり〈存在=眼前性〉というこの存在概念には、特定の時間的意味が含意されていると見る。—中略— 〈存在〉と〈時間〉はなんらかの仕方で連動しているのである。

108 ニーチェには、悲劇時代を生きたソクラテス以前の思想家たちの存在概念は、アリストテレス以降の〈存在=被制作性〉〈存在=眼前性〉という存在概念とはまったく異なるものであったと思えたい。それは、アリストテレスの存在概念に含まれているのとはまったく違った時間的意味を含んだ存在概念、〈存在=生成〉とでも要約できそうな存在概念なのである。ニーチェは、こうした悲劇時代の存在概念をもふくめた壮大な視界のうちにプラトン/アリストテレス以降の存在論の歴史を定位し、それを相対化しようとしていたのである。

109 ハイデガーは存在一般の意味の究明のために現存在—人間存在—の存在構造の分析を準備作業として試みる。すべての存在概念のうちに必ず何らかの時間的意味が含意されているという事態、つまり〈時間〉と〈存在〉の結びつきの必然性は、人間の存在構造に照らし合わせてはじめて明らかにされうるからである。

114 神の存在の存在論的証明: 神はもともと完全な存在者である。ということは、神はすべての肯定的な規定(「神は全能である」「神は無限である」...)を備えた存在者だということである。ところで「存在する」ということも一つの肯定的規定である。神は当然この規定をもふくんでいる。したがって、神は存在する。

その論点は、神の本質存在(である)のうちにその事実存在(がある)がふくまれると見るかどうかにある。

115 神秘的なのは、世界がいかにあるかではなく、世界があるということである(論理哲学論考 6.44)。

七回

121 〈存在〉とは何か。存在とは存在者を存在者たらしめるものである。それは一個の存在者ではない。従って、存在を存在者の間に探し求めても無駄である。ではどこに求めればよいのか。

「現存在が存在を了解するときのみ、存在はある(es gibt)」

「存在は了解のうちにある」

「現存在が存在する限りでのみ、存在はある」

ここで es gibt を与えられるあるいは生ずると読んでかまわない。

125 人間は、現在与えられている環境に、過去や未来にあたり可能である環境構造を重ね合わせ、これをもとに現在与えられている環境がその可能な一つの局面であるような高次の構造を構成することができる。

126 こうして人間は、動物のように自分が生きている環境構造をそれしかないものとして受け取るのではなく、ほかにもあり得る環境構造のうちの可能な一つとしてとらえ、いわばそこから少し身を引き離すことが出来るようになる。それを可能にする高次構造が〈世界〉と呼ばれているのである。

129 現存在がそんな風にして現に与えられている環境から身を引き離すその事態を〈超越〉と呼ぶ。現存在はいわば〈生物学的環境〉から〈世界〉へ超越するのである。

130 〈存在企投〉とは、現存在が生物学的環境を〈超越〉して、〈存在〉という視点を設定し、そこから己の生きてくる環境を見なおすことである。—中略— 現存在はその環境を超え出て〈存在〉という視点に身をおくことによって、おのれと出会うものすべてのものを一様に、そうした特定の意味を離れた〈存在者〉として見ることができるようになる。ハイデガーが〈存在企投〉と〈超越〉と〈世界内存在〉は同じ一つの事態に関わるという意味が分かるであろう。

138 一般に、フッサール-シェーラー-ハイデガー-メルロ=ポンティという現象学の展開と20世紀前半の生命科学の発展には深い相互影響の関係がある。

十回

186 ハイデガー「それはなんであるか—哲学とは」
〈哲学〉という言葉はギリシアで生まれ、ギリシアにしか生まれなかった。〈哲学〉こそが「ギリシアの精神の実存」を規定していたと考えることができる。哲学はどここの文化圏にもどの時代にもあるような普遍的なものではない。科学的知や科学技術の成立は〈哲学〉と呼ばれる特殊な知を形成原理としてきた西洋=ヨーロッパ文化の展開の必然的結果である。